ホ　リ　遺　跡

第２次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

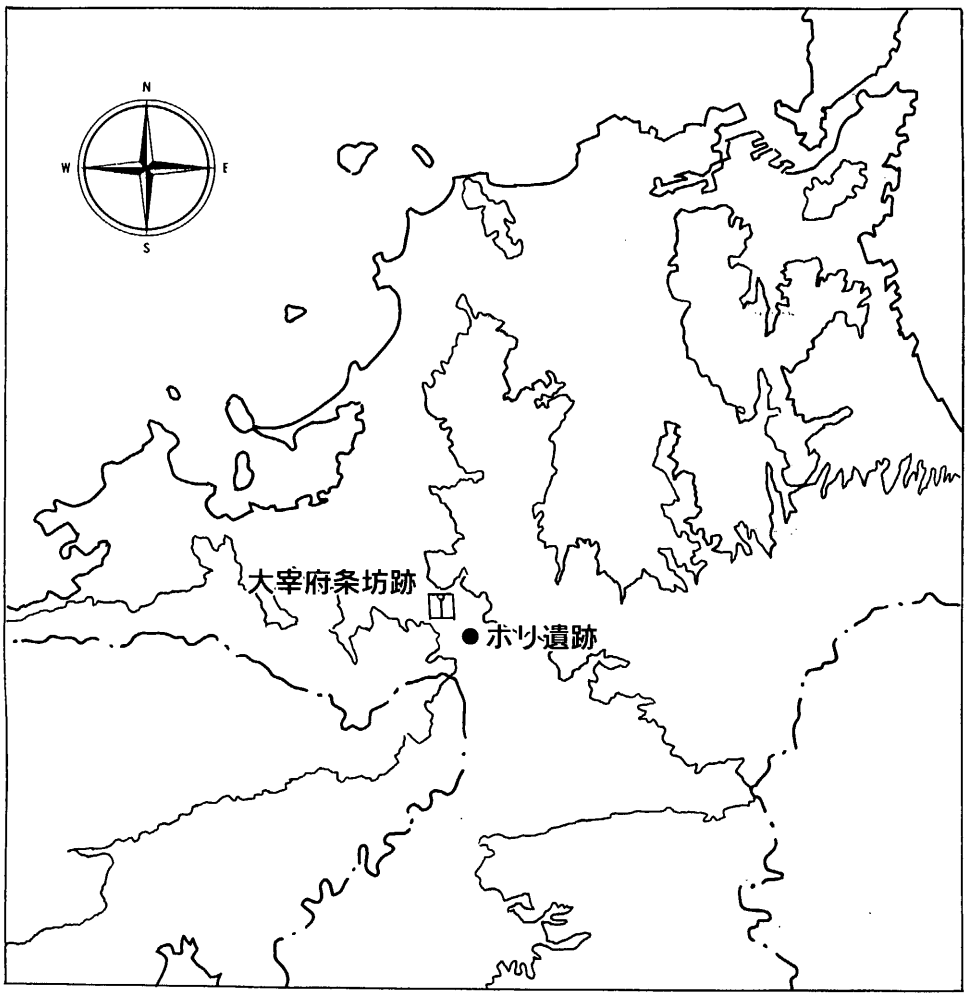
第68集

２００１

筑紫野市教育委員会

ホリ遺跡

第２次発掘調査



例　言

1．本書は共同住宅建築に伴い筑紫野市教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2．この調査は筑紫野市教育委員会が、八尋克三氏より委託を受けて実施した。
3．調査対象地は筑紫野市大字針摺384番地の２である。
4．現地での調査にかかる実測および写真撮影は奥村俊久が行った。
5．出土遺物の実測は奥村が行った。
6．製図は藤村佳久恵（(有）文化財テクノアシスト）が行った。
7．出土遺物の写真撮影は奥村が行った。
8．赤色顔料の分析は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
9．遺構については単体で完結すると考えられる遺構については頭にＳを冠し１から通し番号を付け、単体で完結しないと考えられるピット等の遺構は頭にＰを冠し同じく１から番号を付した。
10．報告に当たっては遺構の性格付けを行い、墳墓をＳＴ、土壙をＳＫ、溝をＳＤの略号を与え、その後に現場で付した番号をそのままに付した。ピット等については頭にＰを付した。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 ……1
Ⅱ　位置と環境 ……1
Ⅲ　調査の内容 ……5
　１．墳墓 ……5
　２．溝 ……6
　３．その他の遺構 ……7
Ⅳ　まとめ ……7
附　筑紫野市、ホリ遺跡における蛍光Ｘ線分析 ……10

挿　図　目　次

第１図　ホリ遺跡周辺遺跡分布図（縮尺　1/25,000）……2
第２図　ホリ遺跡周辺地形図（縮尺　1/5,000）……3
第３図　ホリ遺跡第２次発掘調査遺構配置図（縮尺　1/200）……4
第４図　ＳＴ実測図（縮尺　1/40）……5
第５図　ＳＴ実測図（縮尺　1/40）……6
第６図　P12出土遺物実測図（縮尺　1/3）……7
第７図　唐人塚遺跡遺構配置図（縮尺　1/200）……8
第８図　中島遺跡墳墓遺構配置図（縮尺　1/100）……9

I　調査に至る経過

平成11年12月10日に、八尋克三氏から筑紫野市大字針摺173番地外、1,384.20㎡の共同住宅建築予定地の文化財所在について照会がなされた。筑紫野市教育委員会では建築予定地が周知の遺跡内であり、南側隣接地についても遺構が確認されていることから、12月27日に確認調査を実施した。その結果、削平が著しいものの北半部に遺構が検出された。また、確認調査前の12月20日には筑紫野市開発行為等整備要綱に基づく事前協議が行われ、確認調査の結果に基づき文化財保護法にかかる必要な手続きをとることを指示した。平成12年1月7日に文化財保護法57条の２に基づく届出がなされた。平成12年1月19日、本事業地に係る農地部分の転用申請に基づく事前協議があり、前述の届出に基づく指示に従う旨の指示を行った。同年2月10日付けで県教育委員会から八尋克三氏に工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があった。八尋克三氏はこの指示を受け、筑紫野市教育委員会に委託し、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとした。埋蔵文化財発掘調査の委託契約は平成12年6月26日に締結した。

発掘調査期間

発掘作業　平成12年７月24日～平成12年８月25日
整理作業　平成12年９月１日～平成13年１月12日

調査組織

庶　　務	筑紫野市教育委員会	教育長			永渕　正敏
		教育部	部長		岡部　隆充
			社会教育課	課長	田中　哲也
				文化財担当係長	古賀　幸信
				文化財担当主事	奥村　俊久
発掘調査	筑紫野市教育委員会	教育部	社会教育課	文化財担当主事	奥村　俊久

II　位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。市は筑紫山地と、その間に開けた地溝帯状の二日市低地帯、および筑紫山地から二日市低地帯方向に流れる河川によって形成された河成低地などから成る。約９万年前の阿蘇山の噴火に伴うＡso４火砕流は、筑紫野市の低地部にも押し寄せ、一帯を埋め尽くした。その後の河川等の浸食作用により市の各所に火砕流堆積物からなる丘陵や台地状地形が形作られ、市内に所在する遺跡の多くは、これらの上に所在する。低地帯のうち市域北部は博多湾に注ぐ御笠川水系の鷺田川流域、その外の地域は有明海にそそぐ筑後川水系の宝満川流域となる。この低地帯には博多湾側と有明海川の流域界があり、谷中分水界は、現在は宝満川の支流となっている山口川の流域変更によって形成されものである。

ホリ遺跡はこの分水界域にあり、南側前面に山口川が流れるＡso４台地上に存在する。

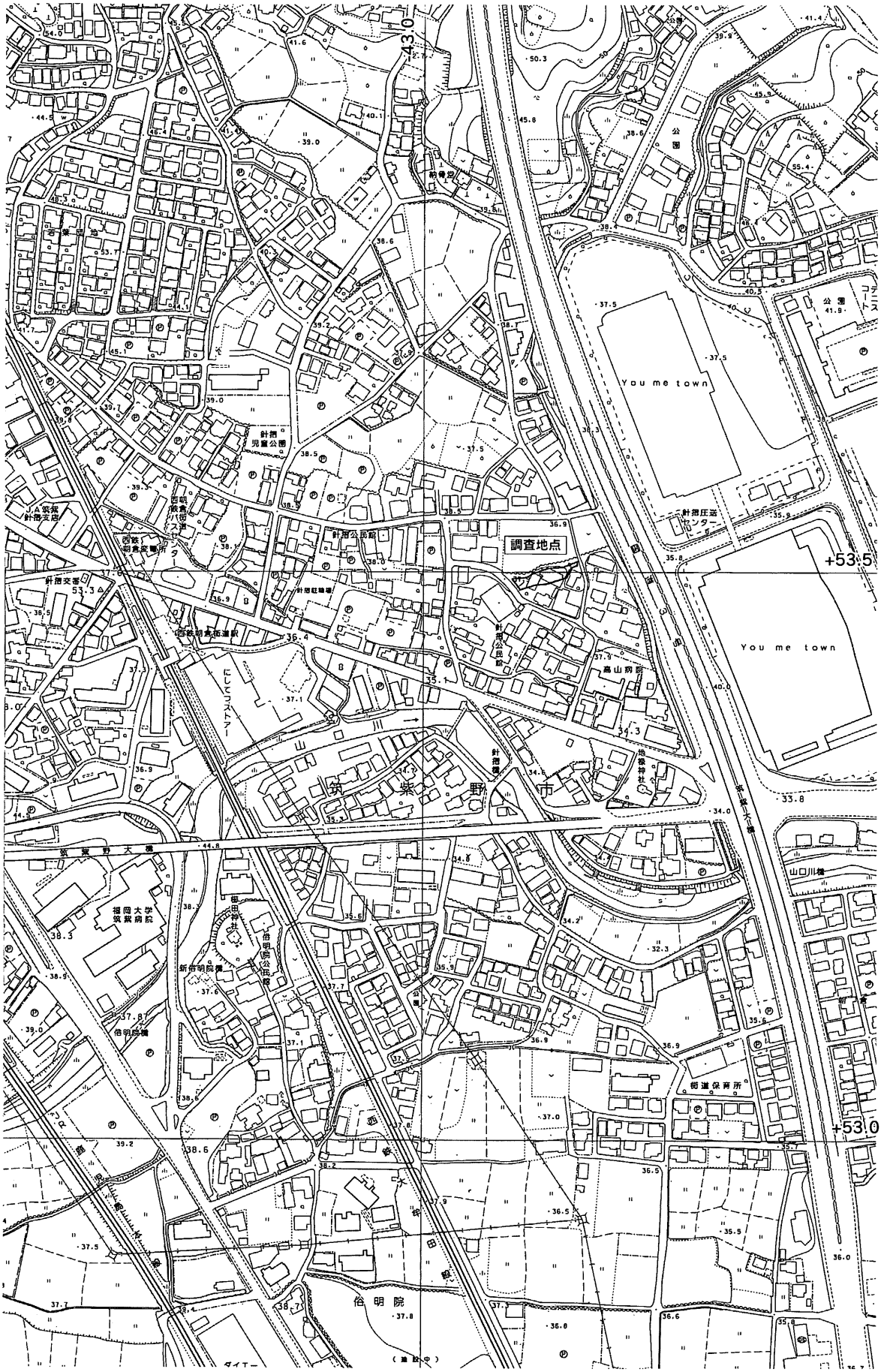
註

参考・引用文献

磯　望　「地形と景観の特徴」筑紫野市史－上巻－　第一編第一章第一節

第１図　ホリ遺跡周辺遺跡分布図（縮尺　1/25,000）

1．大宰府跡	2．二日市宿跡	3．原口古墳	4．中原遺跡
5．針摺遺跡	6．大曲り遺跡	7．野黒坂遺跡	8．イカリノ上遺跡
9．上ノ浦遺跡	10．峠山遺跡	**11．ホリ遺跡**	12．俗明院跡
13．岸手遺跡	14．八反畠遺跡	15．大坪遺跡	16．大牟田西遺跡
17．竹敷遺跡	18．永岡遺跡	19．大牟田東遺跡	20．常松遺跡



第２図　ホリ遺跡周辺地形図（縮尺　1/5,000）

第３図　ホリ遺跡第２次発掘調査遺構配置図（縮尺1/200）

Ⅲ　調査の内容

調査区中央部には宅地の基礎が残り、その北には溝、および浅いピットが検出されたが、埋土の状態から古い遺構と推定されるのは僅かである。基礎の西側には墳墓と考えられる遺構が７基検出された。最も西の方形の遺構は近代、又は近世の墓と推定される。その他の遺構状のものも埋土は黒色を呈すが、ゴミ穴や馬を埋めた穴等、地元の聞き取りの結果を含め近代のものと推定される。

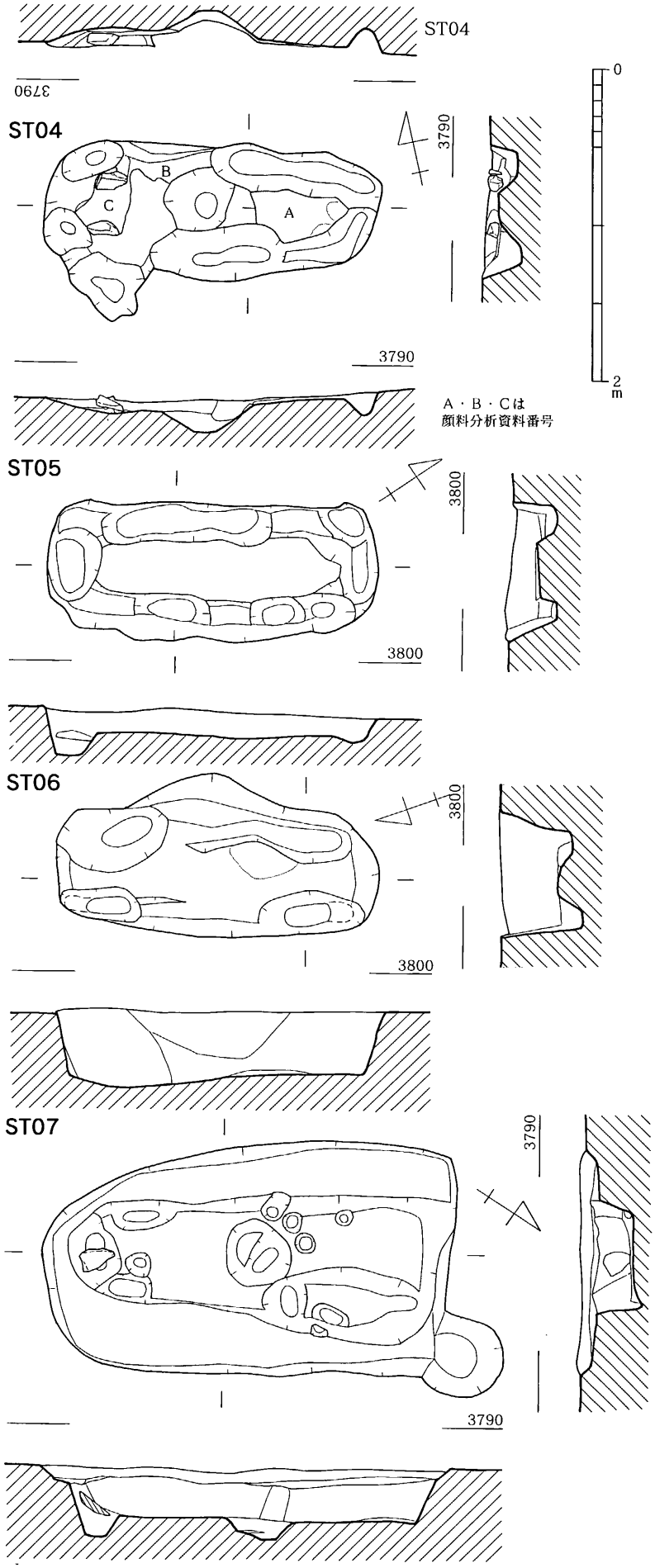
１．墳墓

（1）ST04（第４図　図版２）

長さ215cm、幅88cmを測り、主軸をＮ－77°－Ｗにとる。残りは極めて悪く、よく残っている部分でも床面まで５cm余りである。中央と南西側には攪乱と思われるピットがある。床面の西端両側部にはピット状の掘り込みと、東半部の周囲には溝状の掘り込みが認められた。また、西端のピットの内側には長さ20cm程度の石が立てられていた。床の中央部を除く部分には赤色顔料が検出されたが、確認できなかった部分は攪乱の影響があった可能性が高い。

（2）ST05（第４図　図版２）

長さ210cm、幅80cmを測り、主軸をＮ－34°－Ｅにとる。残りは床面まで15cm前後を測る。床面の周囲には溝状またはピット状になる掘り込みが連続して全周するが、木口部と側壁部は独立



第４図　ST実測図（縮尺　1/40）

した掘り込みになっていることが観察される。

(3) ST06（第４図　図版２）

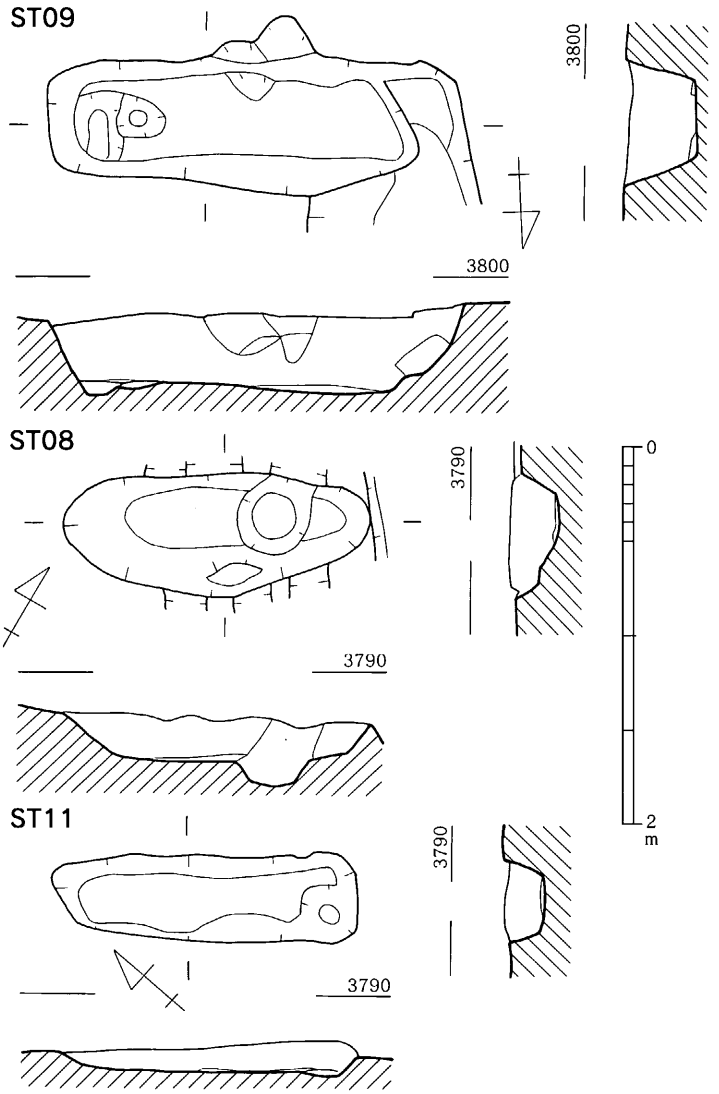
長さ205cm、幅60cmを測り、主軸をＮ－19°－Ｅにとる。深さは40～50cmを測り、比較的残りが良いほうである。側壁部の四隅がピット状をなし、さらに北隅と南隅のピットから浅い掘り込みが延びる。床面の一部に薄っすらと赤色顔料が認められた。

(4) ST07（第４図　図版３）

長さ260cm、幅150cmを測り、主軸をＮ－33°－Ｗにとる。二段掘りとなっており、棺部は長さ235cm、幅95～65cm、深さ20cmを測る。南東部の木口と両側、北隅の側壁部に掘り込みが認められた。

(5) ST08（第５図　図版３）

長さ164cm、幅65cmを測り、主軸をＮ－69°－Ｅにとる。深さは20cmほどしか残っていない。中央東よりに後世のピットがある。外の墳墓のプランが基本的に長方形であるのに対し、本遺構は長楕円形を呈す。



第５図　ST実測図（縮尺　1/40）

(6) ST09（第５図　図版３）

長さ190cm、幅75cmを測り、主軸をＮ－87°－Ｗにとる。深さは40cmほどを測り、東側の木口部に掘り込みが見られる。

(7) ST11（第５図　図版４）

長さ155cm、幅45cmを測り、深さは10～15cm程度で残りが悪い。主軸はＮ－43°－Ｗにとる。南隅の浅いピットは後世の攪乱によるピットである。

２．溝

SD01（図版４）

調査区の北側で検出された。幅は約２ｍを測るが、残りが極めて悪く、最も状態が良い所で深さが10cmほどしか残っていない。概ねＮ－46°－Ｅ方向に主軸をもち北東から南西に向けて僅かな傾斜をもつ。

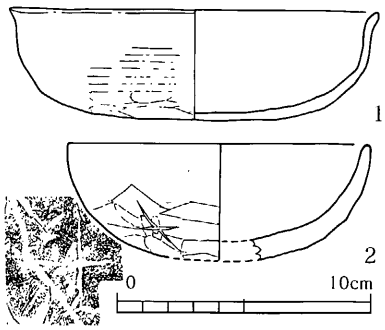
出土遺物

遺物は土師器を中心に須恵器と白磁が出土した。土師器は椀と思われる小片が20点、細片が33点、甕等のやや大振りの器種と思われる小片が56点、細片が33点出土した。須恵器、白磁ともに細片1点が出土した。

3．その他の遺構

P 12（図版４）

SD01の北で検出した一辺１ｍの略方形のピットで、深さは15cmほどで残りは悪い。出土遺物１は土師器椀で、1/3ほどを欠失する。口径14.6cm、器高4.3cmを測る。口縁部は僅かに外反し、体部はあまり張らずに底部へ至る。底部は手持ちのヘラ削りが行われ、その後、体部は刷毛状工具で整えられる。内面底部は器面が荒れて明瞭ではないが、外面口縁部下から内面体部にかけてはヨコナデで調整される。２も椀で口径12cm、器高4.7cmを測る。外面体部下半から底部にかけて手持ちのヘラ削りが施され、体部下位に「十」字状のヘラ記号がある。外面体部上位から内面体部にかけてはヨコナデ調整される。



第６図　Ｐ 12出土遺物実測図（縮尺　1/3）

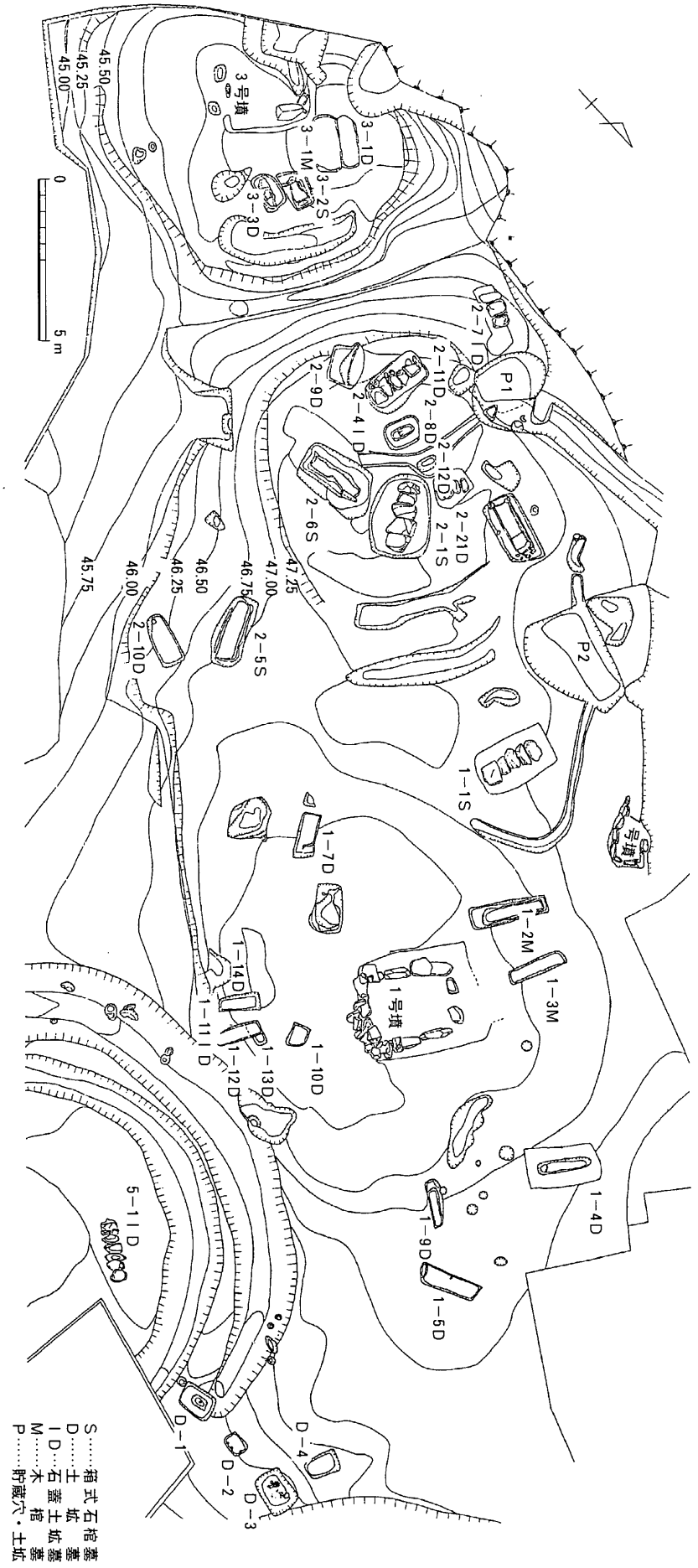
Ⅳ　まとめ

本遺跡の遺構の主体を占めるのは墳墓であるが、遺構の残りが悪く、また時期を確定しえる遺物も出土しなかったため、その性格を明確にしえない。限られた観察結果からみると、ST04・05は床面周囲の掘り込み幅が比較的広く、その底面もピット状になっていることから箱式石棺墓の可能性が高いと思われる。また、ST06・07もその可能性も考えられるが、比較的、棺部の残りが良いにも関わらず、まったく石材が見られないことから木棺墓等の可能性も否定できない。ST09は棺部床の一方の木口部に掘り込みがあり唐人塚遺跡[註1]１-５号土壙墓に類似する。ST08・09は前述の墳墓とともに墓域を形成している点等を考えると土壙墓もしくは石蓋土壙墓の可能性を考えたい。これらの時期についても推測の域を出ないが、筑紫野市内で類似するものとしては唐人塚遺跡と中島遺跡[註2]がある。唐人塚遺跡は古墳の下から表１のような先行墳墓群が発見されている。報告書によると、これらの遺構は、ほぼ同一時期の所産と思われるとされ、２-４号石蓋土壙墓の棺外副葬品である布留傾向甕の時期と大きな隔たりはないとされる。また、中島遺跡は第８図に示すように９基の石蓋土壙墓からなるグループ、箱式石棺１基、石蓋土壙墓４基からなるグループ、甕棺墓１基、石蓋土壙墓６基からなるグループで墳墓群を構成する。中島遺跡もそれぞれのグループが隣接して造営され、ほぼ同一時期の所産と考えられ、時期としては西新式土器を用いる甕棺墓の時期と大きな隔たりはないと考えられる。ホリ遺跡もこれらの遺跡との近似性が高く、造営時期は古墳時代初頭を中心とする時期と推測される。

註

註１　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告－ⅩⅧ－　1977　福岡県教育委員会

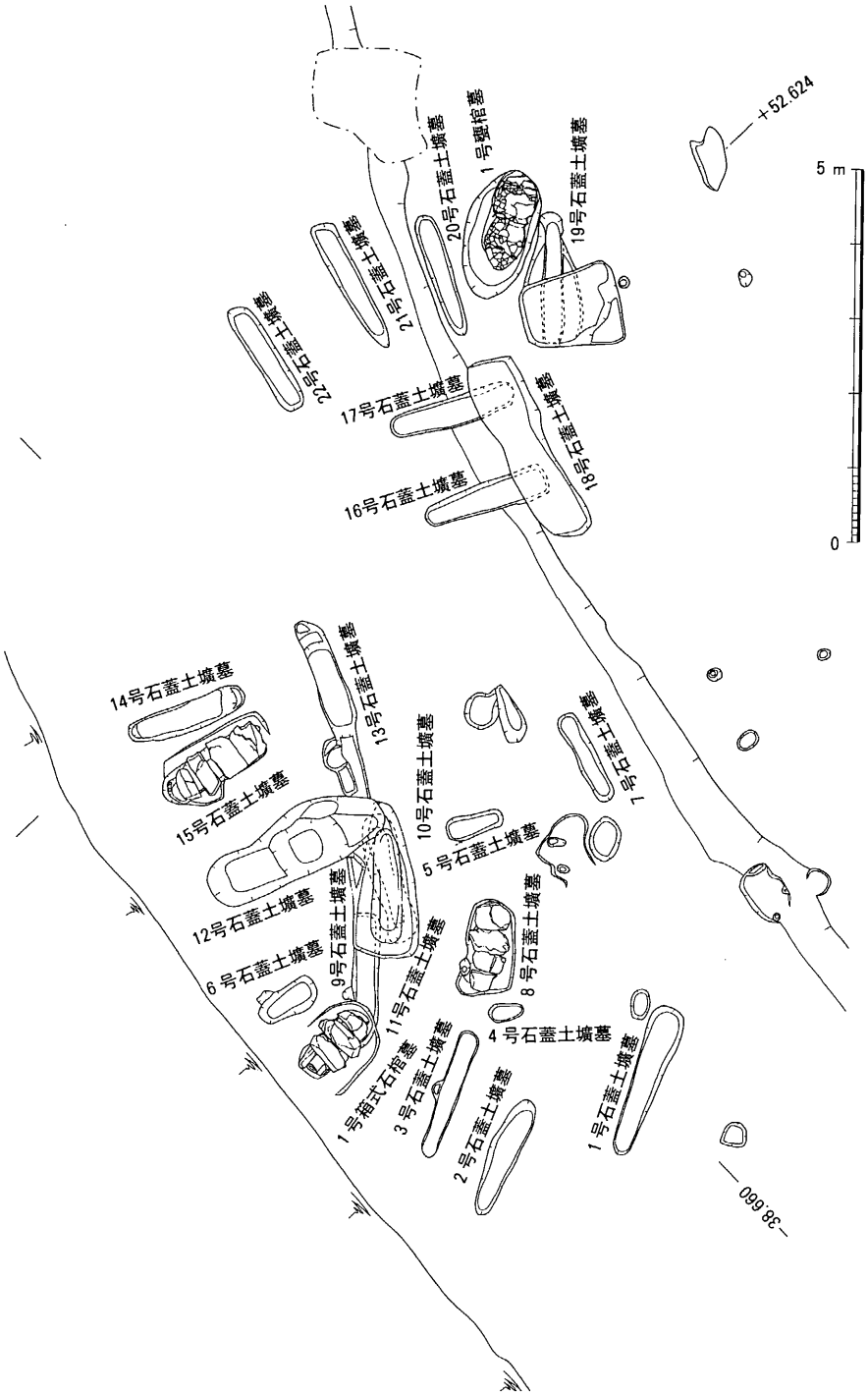
註２　八ヶ坪遺跡・大島遺跡・中島遺跡・人形原遺跡　山家地区圃場整備事業関係埋蔵文化財調査報告書　筑紫野市文化財調査報告第23集　1990　筑紫野市教育委員会



第７図　唐人塚遺跡遺構配置図（縮尺　1/200）

No.	種類	副葬品	備　　考
1 - 1	箱式石棺墓	鉇	両側壁、両小口２段掘り
1 - 2	木棺墓	刀子	片小口２段掘り
1 - 3	木棺墓	管玉　1 ガラス玉４	
1 - 4	土壙墓	無	片小口、両側壁２段掘り
1 - 5	土壙墓	鉄斧	
1 - 7	土壙墓	無	
1 - 9	土壙墓	無	両側壁、両小口２段掘りか
1-10	土壙墓	無	
1-11	石蓋土壙墓	無	
1-12	石蓋土壙墓	無	
1-13	土壙墓	無	
1-14	土壙墓	鉄器	
2 - 1	箱式石棺墓	鉇 ガラス玉	両側壁２段掘り、人骨あり
2 - 2	石蓋土壙墓	無	両側壁、両小口貼り付け
2 - 3	箱式石棺墓	無	両側壁２段掘り
2 - 4	石蓋土壙墓	刀子 土師器甕	両側壁、両小口２段掘り、人骨２体
2 - 5	箱式石棺墓	鉄鎌	
2 - 6	箱式石棺墓	無	両側壁２段掘り
2 - 7	石蓋土壙墓	無	
2 - 8	土壙墓	無	両側壁、両小口２段掘り
2 - 9	土壙墓	無	
2-10	土壙墓	無	
2-11	土壙墓	無	
2-12	土壙墓	無	
3-1東	木棺墓	鉇、刀子 鉄斧	
3-1西	土壙墓	勾玉 有孔円盤	
3 - 2	箱式石棺墓	無	両側壁、両小口２段掘りか
3 - 3	土壙墓	無	両側壁、両小口２段掘り
5 - 1	石蓋土壙墓	刀子	
8 - 1	土壙墓	無	

第１表　唐人塚遺跡墳墓一覧表



第８図　中島遺跡墳墓遺構配置図（縮尺　1/100）

あとがき

本発掘調査は共同住宅に伴い事前に遺跡の記録をとり、この記録をもって遺跡の保存に代える事業でしたが、発掘調査の実施にあたりましては、地元の方々、関係機関のご協力を得ましたが、なによりも、事業主の八尋克三氏には、調査費用の負担、また発掘期間の確保など一方ならぬご理解を頂きました。八尋克三氏はじめ、御協力をいただきました方々に記してお礼申し上げます。

附　筑紫野市、ホリ遺跡における蛍光X線分析

1．試料

試料は、石棺内から採取された赤色顔料を含む３点の土壌（試料Ａ、試料Ｂ、試料Ｃ：第４図参照）である。ここでは、赤色顔料の構成元素から顔料の種類を同定する目的で蛍光X線分析を行った。なお、各試料について赤色部分と褐色部分の２箇所を測定し、比較検討を行った。

2．分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

1）試料を絶乾（105℃・24時間）
2）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
3）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/・でプレスして錠剤試料を作成
4）測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

3．分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表２に示し、おもな元素の検出状況を表３に示す。

4．考察

赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS）、ベンガラ（酸化鉄：Fe_2O_3など）、鉛丹（酸化鉛：Pb_3O_4）が知られている（市毛,1998，本田，1995）。分析の結果、各試料ともFe（鉄）の明瞭なピークが認められ、Hg（水銀）やPb（鉛）は検出されなかった。試料Ｃの赤色部分ではFe_2O_3の含量が19.7%を示しており、比較部分の10.4%の約２倍と明らかに高い値である。また、試料Ａおよび試料Ｂでも、赤色部分におけるFe_2O_3の含量は比較部分よりも高い値となっている。以上の結果から、石棺内から採取された赤色顔料はベンガラと考えられる。

文献

市毛　勲（1998）新版朱の考古学．考古学選書．雄山閣出版，P.42-48.

本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料．考古学と自然科学．31･32，P.63-79.

単位：wt(%)

地点・試料		A		B		C	
原子No.	化学式	赤色部	褐色部	赤色部	褐色部	赤色部	褐色部
12	MgO	1.20	1.15	1.37	1.26	1.23	1.16
13	Al_2O_3	28.29	23.25	27.16	26.04	24.18	25.42
14	SiO_2	55.90	60.70	56.12	58.62	49.36	56.40
15	$P2O_5$	0.66	0.56	0.61	0.74	0.56	0.61
16	SO_3	0.10		0.19		0.14	0.00
19	K_2O	2.18	3.08	2.25	2.44	2.27	3.27
20	CaO	0.74	0.92	1.00	1.03	1.00	1.10
22	Tio_2	1.15	1.18	1.13	1.31	1.23	1.38
23	V_2O_5	0.02		0.05	0.03	0.05	0.03
25	MnO	0.06	0.09	0.05	0.07	0.08	0.08
26	Fe_2O_3	9.63	8.87	9.91	8.35	19.71	10.35
30	ZnO			0.03			
37	Rb_2O	0.02	0.02	0.03	0.02	0.03	0.04
38	SrO	0.02	0.03	0.03	0.03	0.04	0.05
40	ZrO_2	0.04	0.14	0.06	0.08	0.12	0.12

表２　筑紫野市、ホリ遺跡における蛍光Ｘ線分析結果

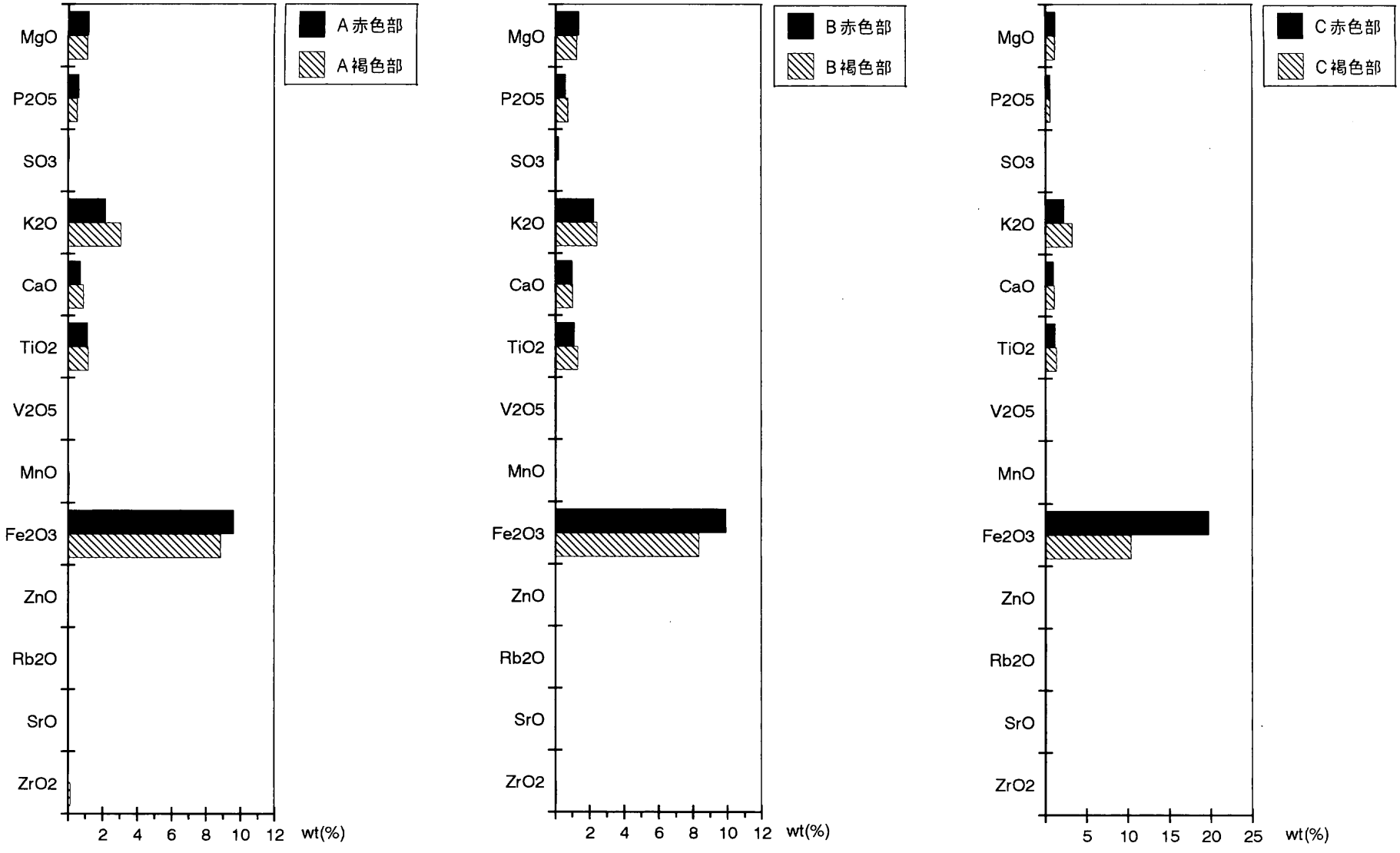


表３　ホリ遺跡、石棺内における蛍光Ｘ線分析結果

図　　版

（1）遺跡全景（上空から）

（2）墳墓検出部全景（上空から）

図版2

（1）ST04

（2）ST05

（3）ST06

（1）ST07

（2）ST08

（3）ST09

図版４

（1）ST11

（2）SD01

（3）P12出土遺物（1）

（4）P12出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	ほりいせき
書名	ホリ遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第68集
編集者名	奥村俊久
編集機関	筑紫野市教育委員会
所在地	〒818－8686　福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号 TEL　092（923）1111
発行年月日	平成13年9月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
ホリ遺跡（ほりいせき）	福岡県（ふくおかけん） 筑紫野市（ちくしのし） 針摺（はりすり）	402176	170355	33° 28′ 53.8″	129° 2′ 17.5″	000724 ～ 000825	1,384.2	共同住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ホリ遺跡	墳墓	古墳時代	箱式石棺墓 土壙墓	土師器	

ホ リ 遺 跡

第２次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 68 集

平成13年11月１日

発 行　筑紫野市教育委員会
〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西１丁目１－１
TEL　092-923-1111(代)
FAX　092-923-9644

印 刷　株式会社　三光
〒812-0015　福岡県福岡市博多区山王１丁目14-4
TEL　092-475-6271
FAX　092-475-6274